

# 広瀬斜子織の歴史

斜子（魚子・七子）織は、18世紀初頭頃から生産されていたと考えられますが、生産された反物は川越商人が扱っていたので「川越斜子」と呼ばれていました。

明治10年、県内初の器械製糸場「暢業社（ちょうぎょうしゃ）」を視察に訪れた県令の白根多助に対し、創業者である清水宗徳は、当地が斜子織の発祥の地であることを強く訴えました。これに感激した県令が次の和歌を詠まれました。

『斜子織 広瀬の浪の 綾なるを 誰川越の 名に流しけむ』

「川越斜子」の名で江戸へ搬出されていたことを惜しみ、広瀬（現在の狭山市）こそが斜子織の本場だと称えたのです。生産者たちは、清水宗徳の提唱で「広瀬組」を結成し、商標をつくるなど品質の維持・改良に努め、生産に励んだということです。

斜子織は絹織物で、羽織・袴・帯として当時の庶民にも愛用されました。特に“広瀬斜子織”は品質が良く、シカゴで開催の万国博覧会に出品したものが「名誉賞」を受賞（明治26年・1893年）しました。また宮内省のご用品にもなるなど高く評価されていました。

明治35年（1902年）には当時の入間郡・高麗郡両郡の生産がピークとなり、10万4000反を製造したということです。しかし、大正期に入り、斜子織は衰退していきました。現在ではその存在は市民の中でもあまり知られておらず、歴史の中に消えてしまったかのようです。



シカゴ万国博覧会の受賞メダル



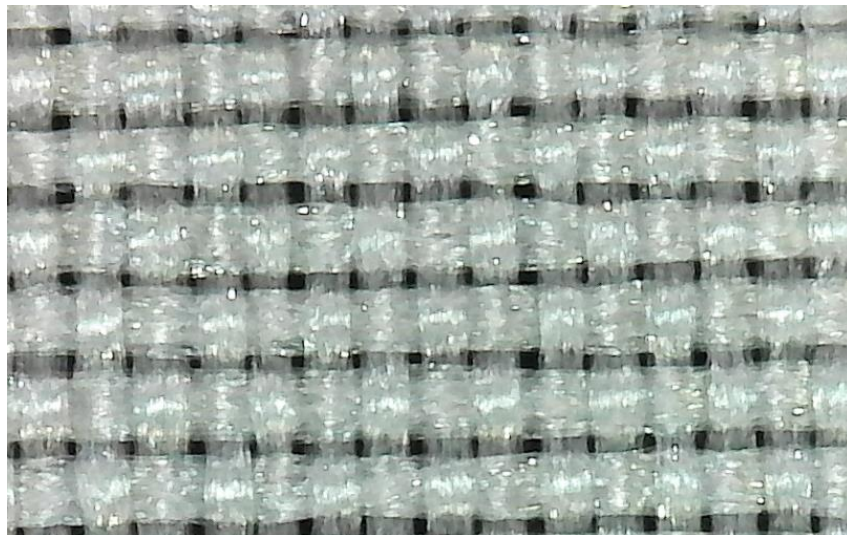
広瀬神社境内 斜子織の碑



広瀬組商標

## 広瀬斜子織はどんな織物？

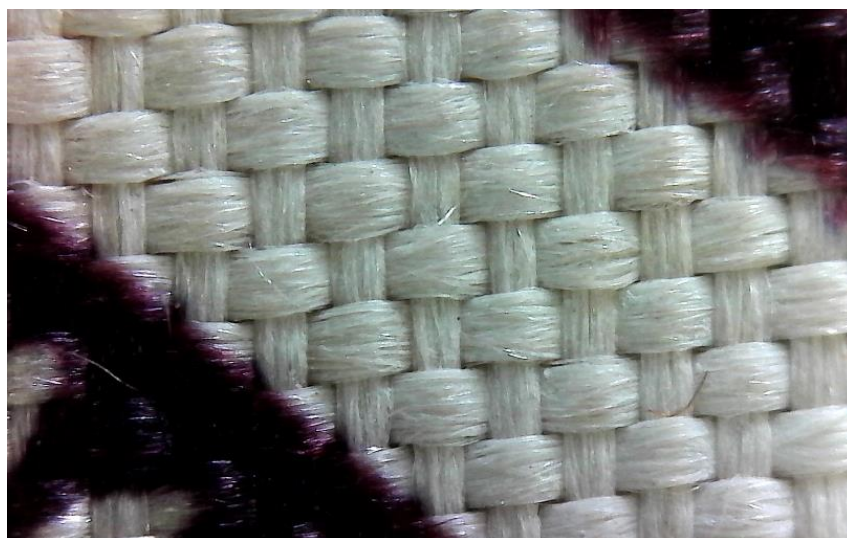
織り技法の種類からいうと平織の仲間です。平織（ひらおり）とは、経（たて）糸と緯（よこ）糸を交互に浮き沈みさせて織る、最も単純な織物組織です。丈夫で摩擦に強く、織り方も簡単のため、広く応用されています。



平織（拡大写真）

中でも経糸と緯糸を2本もしくは数本ずつ引き揃えて、ひとかたまりの糸として織ったものを魚子織（斜子織、ななこ、basketweave）と言います。

一般的な斜子織と広瀬斜子織は少し違っていています。経糸は細い糸を2本引き揃えて使い、緯糸は撚り（より）の無い糸で、経糸より太い糸を1本使って織っているようです。



広瀬斜子織（拡大写真）



## 丈夫で美しい広瀬斜子織

当地域（現在の狭山市）では、蚕を飼い絹糸を引いて絹織物を生産していました。

斜子織は「白ななこ」と呼ばれ、白生地のまま売られていました。当時の斜子織の生産農家は入間川沿いに多くありました。生糸を精練して入間川から引いた用水で洗うと、真っ白で光沢がある糸ができたそうです。

緯（よこ）糸には撚り（より）をかけていない太い糸を使い、それを細い経（たて）糸で抑えるように織っているため、緯糸がふっくらと盛り上がったように見えます。それが魚卵のように見えますし（魚子織）、斜めに並んで畝のように見えます（斜子織）。

平織りなので経糸と緯糸の交差する点が多くあります。そのため張りが強く、耐久性が高く、摩擦に強い生地に仕上がります。しかし一方で交差する点が多い織物は、隣の糸から離れようとする力が働くため隙間が多くなりがちですが、広瀬斜子織では経糸の密度を高め、緯糸の打ち込みを強くすることで、しっかりした布にしていたようです。織りあがった布の手触りは、ふっくらして、光沢があり、しなやかで、軽く、腰があるなどの言葉が当てはまる絹織物になっていました。

当時は男物の正装（黒紋付）、女性用では帯にも使われていたとのこと。この地方の羽根つき唄に次のような一節があります。

「いつきてみても ななこの帯を やのじ（也の字）にしめて」  
残念ながら斜子織の帯が現存するかは、確認できていません。



狭山市立博物館所蔵

## 広瀬斜子織の再現に向けて

広瀬斜子織再現を目指して、狭山遊糸会では、機（はた）が残っていないか、市内の旧家などを訪ねまわりましたが、20～30年前に処分してしまったというお話を、多くのお宅で聞きました。

そんな中、2014年に狭山市立博物館の収蔵庫で古い機に巡り会うことができ（下、写真①）、広瀬公民館に置かせてもらうことになりました。

機の修理をしてどうにか動くようになり（下、写真②）、1600本の経糸を通すための糸綜紘も作りしました。

2016年後半になって、織れるところまでやっときぎつけましたが、博物館所蔵の昔の名品“広瀬斜子”の反物と比べてみると、まだまだの状態でした。

現在、当時の糸に近いものを入手できるようになったので、試織（ためしおり）を重ねて再現の完成度も徐々に上がってきました。

再現のための作業をしていると、当時の人々の技術、智慧と努力はやはり素晴らしいと感服します。ふるさとに先人の残した名品があるのは誇らしいことであり、その高度な技術は途絶えさせてはならないと思います。地域の皆さんのお力を借りながら、再現を成功させて次の世代にも伝えていけたらと考えています。



①狭山市立博物館にあった機



②広瀬公民館での機

狭山市立博物館所蔵  
広瀬斜子織



黒紋付羽織



## 広瀬斜子織の名前の由来は？

斜子（魚子・七子）織は、18世紀初頭頃から生産されていたと考えられますが、生産された反物は川越商人が扱っていたので「川越斜子」と呼ばれていました。

明治10年、県内初の器械製糸場「暢業社(ちょうぎょうしゃ)」を視察に訪れた県令の白根多助に対し、創業者である清水宗徳は、当地が斜子織の発祥の地であることを強く訴えました。

これに感激した県令が次の和歌を詠まれました。

ななこおり ひろせのなみの あやなるを たれかわごえの なにながしけむ  
『斜子織 広瀬の浪の 綾なるを 誰川越の 名に流しけむ』

広瀬神社境内には、広瀬斜子織を称賛する県令の和歌が刻まれた石碑があります。これは明治24年(1891年)織物関係者によって建てられました。(下写真) 明治18年(1885)、上広瀬村と下広瀬村の38名が発起人となり同業者組合である「広瀬組」を結成しました。この商標の中央には県令の和歌が書かれています。「広瀬組」の商標で様々な共進会や世界博覧会に出品し優秀な成績を取めたことから、「広瀬斜子織」の名前が定着してきたものと考えられます。



広瀬神社の石碑

## 織った布はどうしたのですか？

各農家や「斜子屋」で織られた反物は、高級な絹織物として川越や飯能の商人に買い取られました。

そして、東京方面へ送られ、三井や大丸などの有名な呉服屋で取り扱われました。

丈夫でしっかりした織の斜子織は相撲取りにも人気があり、なかには織り手のご指名もあったそうです。

農家では、農閑期に織っていて、家族の衣類などにもなりました。

## 染色はどうしたんですか？

精練（セリシンというたんぱく質を取り除いて糸を柔らかにする作業）に適した入間川の水でさらされ、光沢のある絹糸となって織りあげられました。

そうして広瀬斜子織は「白ななこ」として、白生地で販売していました。

広瀬斜子織は上質な美しさがあったと想像できます。





## どんな人たちが 織っていたのですか？

農家が農閑期の副業として織っていました。織り手は主に女性です。  
水富村では、明治19年(1886年)に30戸だった斜子織の生産農家が、明治26年には80戸、明治28年には100戸と増加していきました。

「斜子屋」として専業で織っていたのは数軒であり、東北方面から若い女性が年季奉公で働いていた家もあったそうです。

## どこの地域で 織っていたのですか？

広瀬、柏原、奥富、入間川が主で、柏原では15～16軒ありました。  
明治35年(1902年)の入間川商工図には、9軒の「白斜子織製造」の文字が見られます。

斜子織は、京都(最優品)や八王子、桐生、上田、足利などでも織られており、清瀬でも織られていました。





## いつ頃始まり、いつ頃まで 織っていたのですか？

「広瀬斜子織」と呼ばれるようになったのは明治時代ですが、広瀬地域を含めて斜子(魚子)織が生産されるようになったのは、古くは18世紀初頭頃と考えられます。  
寛永2年(1705年)、川越藩の秋元喬知(たかとも)が甲斐の国・山梨から川越へ移封した折に、職工を連れてきて「川越平(絹)」を作らせました。川越平(平絹)は、経糸1~2本、緯糸2~3本を引き揃えた平織であり、斜子織の技術と似ています。  
川越平の織機を利用して斜子織を織ることは技術的に可能であり、川越平が周辺地域に伝わりながら変化していく中で「斜子(魚子)織」が誕生したと考えられています。  
斜子織は「白ななこ」として織られていて、幕末から明治にかけて盛んに織られるようになりました。  
清水宗徳の働きかけで桑園面積が増加して養蚕業が盛んになったことや、「地機」(じばた)に代わって「高機」(たかはた)が普及することで生産力が急増しました。  
また、用水を流れる入間川の水や井戸水は、生糸を精練して光沢のある美しい絹糸を作るのに最適でした。

埼玉県は全国屈指の機織りの盛んな県であり、中でも、当時の入間・高麗の両郡は斜子織や木綿飛白(かすり)の中心的生产地となりました。  
明治26年(1893年)、水富村※の斜子織の生産量は14,000反でした。それは、入間・高麗両郡の生産量38,463反のうちの36,4%占めるほどになりました。〈※水富村・明治22年、上広瀬村、下広瀬村、根岸村、笹井村が合併〉

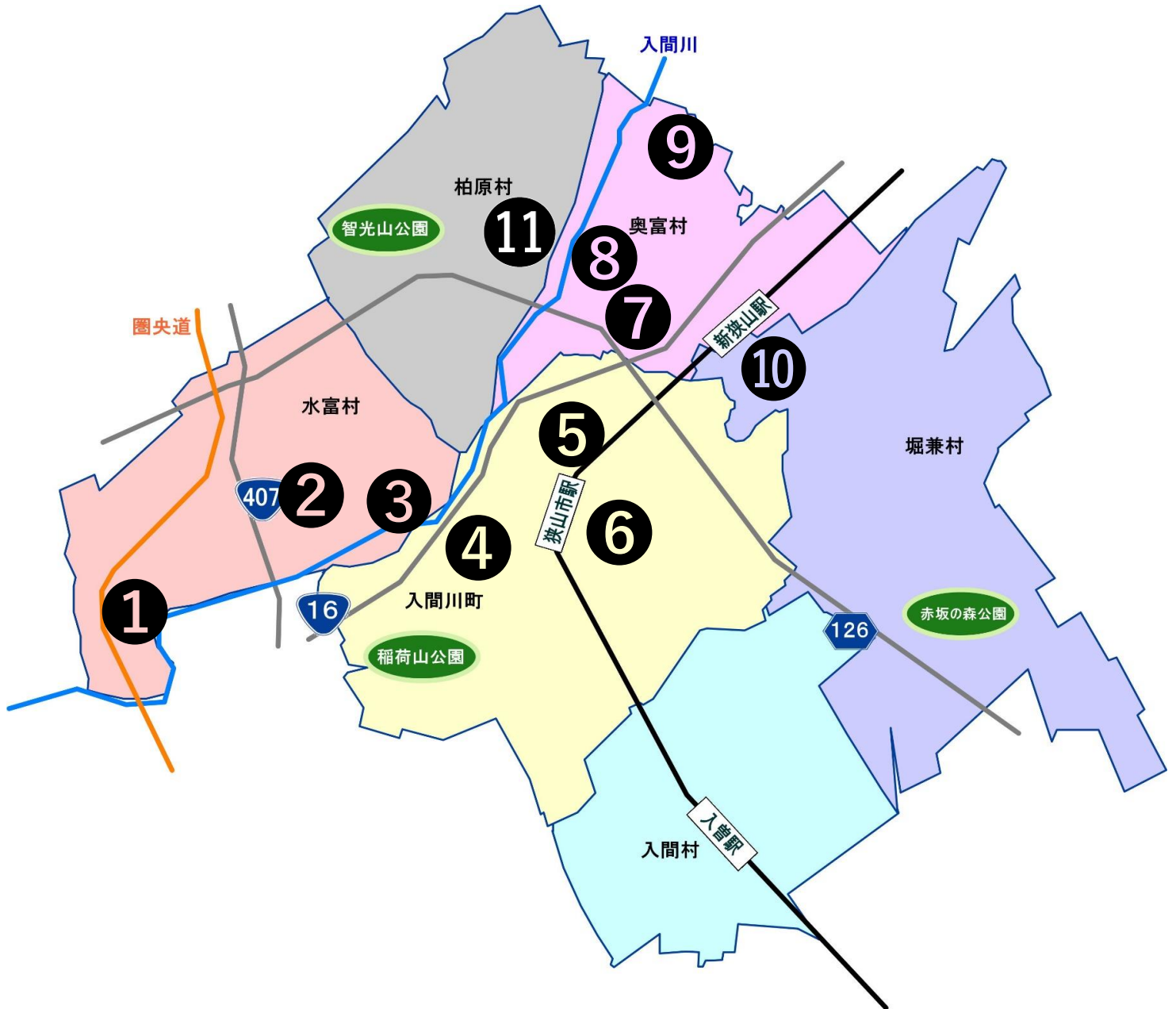
その後、入間・高麗両郡の斜子織の生産量は、明治35年には104,000反を生産しました。しかし、それをピークに斜子織の生産量は減じていきます。  
原因としては、着物文化が廃れていき需要が減じたこと、機械織の羽二重が登場して時間と労力の割に手織りの斜子織は利益率が低いことがあげられます。  
また、織物税10%が課せられたことで、織物製造を休止する農家が続出しました。

しかし、斜子織が全く生産されなくなったわけではありません。  
柏原・水富では、斜子織とともに絹綿交織物(けんめんまぜおりもの)である博多結城をわずかながら生産していましたが、その後はそちらに方向転換をしていきました。

明治44年には、絹綿交織物は斜子織の生産高(64,831円)の10倍(637,400円)になっていました。  
斜子織は次第に衰退し消えていきますが、昭和20年頃まで、羽根つき唄の中に次のように歌われていたことが伝わっています。

「 ♪ ななこの帯を 也(や)の字に締めて ♪ 」

## 狭山市内に現存する養蚕信仰に 関係する神社や石祠など①



- |             |      |              |          |
|-------------|------|--------------|----------|
| ① 笹井白鬚神社境内  | 蚕神神社 | ⑦ 梅宮神社境内     | 蚕影神社     |
| ② 広瀬浅間神社境内  | 養蚕神社 | ⑧ 神明宮        | 石祠       |
| ③ 養蚕神社(広瀬)  |      | ⑨ 亀井神社境内     | 蚕神の石祠    |
| ④ 諏訪神社      |      | ⑩ 東三ツ木の薬師堂境内 | 馬鳴菩薩の石仏  |
| ⑤ 愛宕神社(峰)境内 | 蚕影神社 | ⑪ 常楽寺境内      | 蚕生大権現の石祠 |
| ⑥ 三柱神社      |      |              |          |



## 狭山市内に現存する養蚕信仰に 関係する神社や石祠など②



養蚕は農家の重要な現金収入でした。

「お蚕（こ）さま」と呼び、蚕を病気や害虫から守り良い繭を作らせるため、人間の生活より優先し細心の注意を払い飼育しました。蚕室には養蚕守護のお札を貼って祈り、感謝しました。

狭山市内には当時の信仰を示す文化財が残っています。その中から主な文化財をご紹介します。

詳細は狭山遊糸会ホームページをご覧ください。



～調査を終えて～

\* 狭山市域における養蚕に関係する神社の呼び方は蚕影神社、蚕神、蚕神神社、養蚕神社などいくつかありますが、勧請したもとは茨城県つくば市の蚕影神社と推察されます。

\* 三柱神社や諏訪神社・神明宮などのように、蚕を育てるうえで最も気を使う「火防せ」（ひぶせ）や「ネズミ除け」を祈願する信仰が結びついている神社があることがわかりました。

\* 「稻荷様から白狐を借りてきて、蚕をネズミに食べられないようお願いした」との聞き取りが残っているが、養蚕のためには身近な神仏にも祈願したことが伺えます。





**狭山遊糸会**

**「広瀬斜子織」再現研究報告会**

**2024年2月3日  
広瀬公民館**

発行者 狭山遊糸会

代表 野本 照子